

いずみさの昔と今 第286回

「泉佐野の画家―向井久万―」

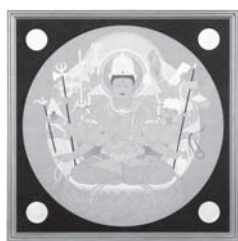
今回は10月12日(土)より開幕する秋季特別展「向井久万仏画展」に関連して、泉佐野出身の画家、向井久万について紹介します。平成29年度に開催された「向井久万裸婦像展」の後編にあたり、人体の延長として描いた仏画を中心に展示を行います。

向井久万は画家として沢山の絵を描き続けました。その沢山ある作品の中で、一貫として「人体を描く」ということを追求し、その画題として前半期には日本画で裸婦を描き、後半期には人体の延長として仏画を描きました。久万の緻密な迷いの感じられない線で描かれた仏画は、どこか儚く、神秘的な印象を受けます。

久万は明治41(1908)年、泉南郡上之郷村机場(現泉佐野市上之郷)で生まれました。大正15(1926)年に大阪府立岸和田中学校を卒業し、京都高等工芸学校(現京都工芸繊維大学)図案科にて学びます。絵を描きはじめてのは、岸和田中学校在学中の頃

からだといわれており、この頃に描かれた習作は水墨画やデッサン、室内装飾のパース図(建物の外観や室内を立体的な絵にしたもの)など、多岐にわたっていました。その後昭和4(1929)年に京都高等工芸学校を卒業、京都の丸紅に入社し、図案(デザイン)を担当しました。しかし本格的に絵の制作に専念するため丸紅を退職し、昭和12(1937)年小川翠村の紹介により、当時京都で最大の西山翠嶂(にしやますいしやう)の画塾青甲社(しやうこうしゃ)に入門します。昭和14(1939)年、新文展にて初入選すると、翌年の日本画展にて佳作、同16年には第4回新文展で特選を受賞するなど、その名を知らしめることとなります。その後も新文展に出展を続け、戦後にも第2回、3回目展(戦後に新文展から改正)に出展します。そして昭和23(1948)年、久万は上村松篁や秋野堅二ら数人の画家とともに「創造美術」(のちの創画会)を結成しました。

当時創造美術の結成はとも注目されたようで、新聞には新団体結成の記事が載せられ、東京と京都では発会式が行われるほどでした。創造美術結成時の会員は、すべて官展(政府主催の美術展覧会のこと)や院展(日本美術院主催の美術展覧会のこと)などで入選、特選を得ている実力者ばかりでした。このように久万は中学校の頃に絵を描き始め、一度就職をするものの画家を志し、画塾に入塾します。戦時中には約1年間の中断も余儀なくされましたが、戦争が終結した後、毎年1作品は作成・出展するほど、精力的に絵を描き続けました。



▲准胝仏母(当館蔵)

レイクアルスタープラザ・

カワサキ歴史館いずみさの

☎469-7140 Fax469-7141

休館日 月曜日、祝日(祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館)

開館時間

午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る③

～絵図編(2)「比売神社」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

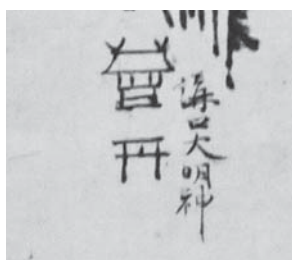
問合先 文化財保護課



日本遺産

約800年前に描かれた「日根野村絵図」において「溝口大明神」と記されている所は、現在、日根神社の境内に摂社として合祀されている比売神社(ひめじんじゃ)と考えられています。

「溝口大明神」はかつて鎌倉時代に日根野一帯が九条家の荘園として開発が進められた頃からの呼称で、絵図においては日根神社とは離れた場所に描かれています。もとは日根野東上の溝ノ口の檜井川沿いにあったとされ、この地域の農業にとって最も大切な水利の導水を図る「井川(ゆかわ)」の「水口」に祀られ、日根神社とともに日根野、上之郷を灌漑する水路に関係する神社であったと考えられています。明治政府による神社合祀政策によって、日根野村の集落毎にあった神社が日根神社に合祀されましたが、比売神社は日根神社とは別に、現在も行事を行っています。本殿は一間社春日造、室町時代の様式を残す桃山時代の建立と考えられており、府指定文化財となっています。



比売神社(本殿)▼
▲日根野村絵図に記された「溝口大明神」



※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用(原本は宮内庁書陵部所蔵)